

平和を伝える人々

ヨハネ20:19~31 / 李正雨師

「神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」

皆様はこの文章についてどのように思っているのでしょうか。罪の赦しについての理解は、それぞれが違うと思います。しかし、ほとんどの人は罪の赦しというものが、抽象的であり、宗教的な傾向が濃いので、神様のみができるものだと思っています。このような考えは、イエス様の時代でも同じでした。当時のみんなは、罪の赦しは、神様のみができるものだと思いました。しかしイエス様は、このような人々の前で罪の赦しを宣言し、それによって律法学者たちは、イエス様のことを心の中で批判しました。マルコによる福音書2章で、イエス様は中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われます。そしてこれを見た律法学者たちは、イエス様が神様を冒瀆していると心の中に考えました。神様だけができる罪の許しを人間であるイエスがしたということです。しかし、イエス様は「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう」と言われ、中風の人を癒されます。このことは律法学者やユダヤ人にとっても衝撃的なことであり、結局これによって人々は神様を賛美しました。これはイエス様の公的な生涯の初期に起こったことでした。そして復活なさったイエス様は、この罪の赦しのことを弟子たちにもう一度言われます。今日の福音書23節の言葉です。「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

ある人々は、イエス様は神の子だから罪を赦すことができたのだと言います。もちろん正しい言葉です。では、イエス様が弟子たちにお伝えになった罪の赦しのことを私たちはどう受け入れたら良いのですか。このことが分かるためには、当時の状況を注意深く調べなければならないと思います。まずイエス様の公的な生涯の初期に起こった中風の人のことを見てみましょう。中風の人がイエス様のところに来るためには、4人が必要でした。そのくらい病気が重かったということです。そして当時の病気についての観点は、人の健康よりは、罪と裁きに結びついていました。健康ではないので病気になったのではなく、罪があったので神様に裁かれたということです。だから病気になった人は、体も心も傷つくしかありませんでした。中風によって体も自由ではないのに、信仰的にも不安な状況だったのです。イエス様はこのような中風の人に、まず罪の赦しを言われました。心の平和を与えてくださったのです。この次に病気を癒されました。これは、イエス様が罪の意識によって恐れている人にどのように対してくださったのかを教えてくださいたいと思います。

今日の福音書に戻りましょう。そしてイエス様が弟子たちに罪の赦しについて語られた時の状況を見てみましょう。19節の言葉です。「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。」弟子たちはユダヤ人たちを恐れています。自分たちもイエス様のように殺されるかもしれないなかったので、戸に鍵をかけて恐れていたのです。このような彼らの前に現れたイエス様は、平和があるようにと言われます。この言葉は二度繰り返されますが、ユダヤ文化での繰り返しは、強調する意味があります。つまり、イエス様は弟子たちが平和を取り戻すことを切望しておられるのです。そしてイエス様は遣わしについて言われます。21節の言葉です。「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」この派遣の言葉は、イエス様がなされたことを弟子たちが引き続いて行うことを示す言葉です。そしてイエス様は「聖霊を受けなさい」という言葉と共に、「罪の赦し」についての言葉を語られます。

このような状況と聖書の言葉をまとめてみましょう。弟子たちは平和と共に遣わされ、聖霊と共に罪を赦すこととなります。イエス様が中風の人に罪の赦しを言われたように、弟子たちも罪の赦しを言うのです。イエス様が弟子たちに平和を伝えられたように、弟子たちは他の人に平和を伝えるのです。これが弟子たちの仕事であり、イエス様の遣わしの目的であるからです。これによって人々は、既存の教えとは全く違うことを感じるができるでしょう。律法ではない福音、罪の意識ではない恵みを感じるができるでしょう。ファリサイ派の人々や律法学者たちの教えとは違うイエス様の福音が人々を導くようになるのです。福

音書の著者たちは、イエス様の復活の後には、「週の初めの日」という言葉を頻繁に使います。今日の福音書19節にも、この「週の初めの日」という言葉が書かれています。これは、単に時間帯を表すのではなく、すべてのことが新しく始まったことを示すことです。過去とは全く違うこと、イエス様によって赦しと恵み、平和と回復がこの世に与えられたというのです。

今日の福音書24節以下には、イエス様の弟子トマスの会話が出てきます。トマスはイエス様の復活を信じなかった人々の一人でした。彼はこう言います。「**あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない(25節)。**」私は個人的にトマスのことが理解できます。経験したことがないことを信じるとは、決して簡単なことではありません。しかしトマスのこの言葉は、イエス様を信じられないという言葉と同じでした。イエス様はご自分の死と復活を何度も弟子たちに言われたからです。トマスの状況は十分理解できますが、トマスが不信を抱いていたということも事実です。イエス様はこのようなトマスのところに来られ、彼にも平和を伝えられます。そしてトマスにご自分の体を確認してみなさいと言われます。これはトマスが信じない者ではなく、信じる者になることを望まれるイエス様の心であり、赦しのジェスチャーでした。トマスはこのように言います。「**わたしの主、わたしの神よ(28節)**」

イエス様は不信を持っていたトマスをお叱りになりませんでした。トマスにも平和を伝えられ、赦しを与えてくださいました。これによってトマスは、不信から戻ってきて再び弟子になりました。聖書には書かれていませんが、言い伝えによると、トマスはインドに行って殉教したそうです。私は、インドに一ヶ月ほど滞在したことがありましたが、インドの教会の名前の中で多くの名前がトマスであり、様々な教会にはトマスの姿が浮き彫りになっていました。このようなことがトマスがインドで殉教したという証拠にはなりませんが、トマスも他の弟子たちのようにイエス様から遣わされたと思います。トマスはイエス様が自分の不信を赦されたように、熱心に罪の赦しを伝えたでしょう。そして多くの人々は、その赦しの中で平和を得たでしょう。

イエス様の時代の一部のユダヤ人たちは、罪について厳しくて敏感でした。それで罪を犯さないように最善を尽くし、神の子になるためには、罪を犯してはいけないと思いました。しかしこのような考えは、偽善に満ちた行為を生み出し、かえって人々に罪を犯させました。罪に対する嫌な思いによって、人々は清い儀式を行い、異邦人と交わりませんでした。罪人たちは永遠に救われない者だと思い、貧困と病気は神の裁きだと思いました。このような状況で、イエス様は罪の赦しを語られ、弟子たちに罪の赦しを伝えなさいと言われました。罪はタブー視するのではなく、現れることであり、真の平和は、罪の赦しを通して成し遂げられることだからです。マルティン・ルターは、1520年に「教会のバビロニア捕囚」という本を書きます。この本には当時流行していた「私的な罪の告白と赦し」に関する文が載せられていますが、ルターはこれに賛成します。賛成だけではなく、教会の中に私的な罪の告白と赦しがあることを嬉しく思っていたようです。なぜなら、信仰の共同体の中で、個人的ですが、お互いの罪を告白し、赦すことは、良心にたぐいぬ治療薬になるからです。ルターはこのように言います。「わたしたちは兄弟に、わたしたちの良心を告白し、心の中に潜在している悪を私的に知らせるとき、兄弟の口から神様ご自身が言われる慰めの言葉を聞くようになるのです。そして、もし私たちがこれを信仰として受け入れれば、私たちは兄弟を通して神様から私たちに言われている平和を聞いているのです。」

私たちは皆、イエス様の弟子として罪の赦しを伝えるためにイエス様から遣わされました。これは皆の平和のためであり、福音の時代が始まったことを知らせることです。復活節第2主日、私は、イエス様の言葉に従って、あなたたちの罪が赦されたことを父と子と聖霊の御名によって宣言します。この赦しの平和が皆様と共にありますように の御名によって祈ります。アーメン